

(市史編さんを終えて)

専門委員 荻原克己

特に歴史とは何かと認識もなしに、たまたま市の行政に長く携わつていて戦後の市政の動きを知っていたので、最初は行政資料の收拾などで役に立てるかと市史編纂に参加した。もう故人となった市役所の大先輩から「市史の編纂を大々的に始めたそだが、昭和三九年に甲府市史を出しているからその後だけをまとめればいいのでは」…という電話があった。そのときは、この意見にあまり奇異を感じなかつたが、専門部会に出席の先生方の討論を聞き、過去の市史を読んできて、歴史を編纂するは單なる史実の羅列でなく、編纂の時代の反映、またその視点にあることが運びながら分ってきた。

この前の市史の編纂と比較しても、所得倍増が叫ばれ高度成長の始まつた一九六〇年前半と東西冷戦が消滅しバブル経済の一九九〇年とは過去の歴史を見る市民の目も異なつて来ている。甲府市の過去の市史は行政史であるが、今度は民衆史の視点で編纂を位置付けられた。これだけに今日的テーマを据え新しい視点に立つと以前に市史で取り上げられた周知の史実であつても新鮮な発見が出てくることを知らされた。しかし、所詮は私などは歴史の素人で、他の先生方のようにしつかりした史観とテーマを据えて編纂に携わったかと考へると内心忸怩たるものがある。

私が担当した現代の市政は太平洋戦争の終戦後からであつて、まだ時が余り過ぎていなくていわゆる時間のフィルターを通つていなければ、歴史的評価の定まらない時代であり、また、関係者が多く現存しているだけにその取りまとめ方に難しさを痛感させられた。現

代だから資料は沢山あるかと思つて收拾整理してみると、特に行政関係には上質の資料が乏しかつた。関係部局に資料をたのんでもわずか数年前のものでも廃棄されていた。現在の市の文書保存規程では市史編纂に役立つ文書はほとんど残らない。その上、各部局で印刷発行される行政資料もほとんど收拾保管されていない。このため将来の市史編纂を考えるだけでなく、文書情報管理を見直すことが必要であるまい。

今回の市史編纂で多くの史料が收拾された。これらの保管管理とともに行政公開の為にも市政資料室のようなセクションがほしい。資料・データの整理保管というだけでなくアップ・ツー・データな資料やデータをシステム的に入力され蓄積されて、いつも市政のビッグな情報が過去のものとともに行政執行に市民に提供されるようなシステムをこの機会に発足させてもらいたいものだ。

市史の編纂に参加したお陰で、私が市に勤務した時の市政を改めて通覽し見直す機会を得た。自分の半生を見返すことが出来たような気持ちも一面で感じている。

交ぼうする教育の再確認

専門委員 斎藤左文吾

私の執筆担当は、『通史編第四巻現代』の『戦後の教育』でした。

昭和二十一年（一九四五）終戦直後から今日までの四十五年間は、日本の歴史の中でも、これほど急激な変革や創造の激しかった時期はなかつたと思われる。

政治・経済・社会をはじめ、教育・文化・市民生活など全般にわ